

バス停の利用環境改善を考える

「バスまちワークショップ」のご紹介

関東運輸局では、今後さらに急速に高齢化が進む中、より多くの方がバスを利用したいと思えるサービス水準を達成するための課題の一つとして、バス停の屋根やベンチの整備といった、人に優しいバスの利用環境形成に焦点を当てたワークショップを開催しています。3月に開催した第1回WSでは、昨年度バス会社へ行ったアンケート結果や先進事例を関係者で共有し、取組を加速させる方策を議論しました。

バスまちワークショップ（第1回）概要

日時：平成30年3月19日(月) 14:00～17:00 場所：東京運輸支局1階会議室

- 関東運輸局から、バス会社アンケート結果の紹介・市役所最寄りバス停調べ・参考事例紹介等の資料説明をしました。
- バスまちの現状について議論し、様々な意見が出ました。
 - ◇ バス停はバスが停まる所というよりも、本来は人がバスを待つ機能を持った場所であるべき。
 - ◇ バス停は、地域の風土を反映していたり、**消えゆく地名**が残っていたり、様々な価値がある。
 - ◇ 地方のバス停は課題が多いがその一つが**暗い**こと。照明が無く、日没後はどこにあるのか視認性がない。防犯の観点からも灯りがつけられないものか。
 - ◇ 屋外広告収入でグレードの高いバス停を整備・維持するという**MCドゥコー社**のビジネスモデルは大発明だが、こうした画期的解決手法がもっと沢山出てくるかという点と厳しい。
 - ◇ バス停におけるベンチ設置の要望は根強いが、順番待ちで混乱が生じてクレームにつながることもあり、利用者からもベンチが邪魔という意見もあり難しい。
 - ◇ 現行条件下で整備できる所は、ほぼ整備済みであり、バス会社でこれ以上の大幅な整備は資金面からも困難。高齢者が増えるなか公共的な施設と位置づけて行政での対応を期待したい。
 - ◇ バス停はあくまで民間事業者の施設であり、**どこまで行政が関与すべきか難しい**。
 - ◇ **自治体の対応にも温度差**がある。行政として何度も現地検して取り組んでいるところや地域住民と協働しているところもあれば、要望活動にとどまっている地域もある。
 - ◇ 残存幅員の規制の問題、景観や広告規制が妨げになる場合などの制度的な制約もある。
 - ◇ 寄りかかるポール型の施設整備は、検討したことはあるが、具体化したものは少ない。
- 今後の政策展開について議論し、以下のような意見が出ました。
 - ✓ 各地の先進的な取組を集めた**参考事例集が示されているが有意義**。これをきちんと作るべき。
 - ✓ 昔、駅にあった黒板のような伝言がかけるような機能がバス停にあってもよい。IT化で情報提供や管理を改善するとともに、そうしたニーズへも対応したい。
 - ✓ コンビニなどの沿道施設でのバス待ちの受入をより本格化するには、容積のおまけなどの経済的**インセンティブを制度化**できれば、それが一番だろう。
 - ✓ 駅前広場などは作りっぱなしで、あまり使い道を考えてない印象を受けるが、改善への取組が各地で始まりつつある。担当者向けのチェックリストなども作れると良いかもしれない。
 - ✓ 埋もれている魅力的なバス停などの写真コンテストなどの仕掛け作りもありえるのでは。
 - ✓ バス停を降りると周辺の**観光地や公共施設の地図**、また、ハザードマップ等もあると良い。
 - ✓ 第二回に向けては、バス停の機能のあり方の部分と、関係者の意思決定プロセスのあり方の2本柱。優良事例の積み上げや、既存の地域交通会議の枠組の活用などを検討してはどうか。

バスまちワークショップの様子

